

# 令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【島小学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策
知識・技能	基礎的・基本的な知識・技能の定着が図ってきたが、個人差が大きいことから、個別に必要な支援を講じていく必要がある。「ドリルパーク」や「スタサブ」等の個別に蓄積されたデータを効果的に活かしていきたい。また、「国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」において課題がみられたため全学年で重点的に取り組み、R7年度の全国学力・学習状況調査等で引き続き改善状況を検証していきたい。
思考・判断・表現	学習過程を見直し、活動の中に共同編集を位置付け、計画的に協動的な学びを通して考えたり、表現したりする。教科横断的な視点として、グラフ等の資料を用いる際、「誰が」「どのような視点で」「どのような単位で」などを意図的に問い、資料の見方を高めていく力を伸ばす発問を意識したい。また、各教科の授業で、根拠資料を基に、自己の考えをまとめる活動を引き続き重視していきたい。

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<p>&lt;学習上の課題&gt; 多くの児童で、基礎的・基本的な知識・技能の定着に課題がみられる。(特に、漢字や計算)</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 児童が反復・習熟に取り組む時間が十分に確保されていない。</p>	⇒ ・低学年は「ドリルパーク」中・高学年は、「スタサブ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む時間を確保する。【週3回以上、授業での実施】 ・児童の学習履歴を確認し、個別に学習計画を立てる時間を設定する【月に1回程度】。
思考・判断・表現	<p>&lt;学習上の課題&gt; 国語・算数の「思考・判断・表現」の記述式問題の正答率が低い。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 授業の中で児童が自己表現する場面が少ない。また、それに対して十分な評価ができていない。</p>	⇒ ・活動の中に共同編集(Canva等)を位置付け、協動的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする。【R5年度さいたま市学習状況調査「学級の友達とて話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」の質問項目において、肯定的な回答の割合が92%以上】(R4年度89%)

全国学力・学習状況調査  
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 授業改善策の達成状況
知識・技能	B	・低学年は「ドリルパーク」中・高学年は、「スタサブ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む、基礎基本の定着を図る活動を継続できた。 ・朝の時間や授業の前後、長期休業中の課題、日頃の宿題や自習の時間にも積極的に取り入れることで、取り組む時間を確保することができた。
思考・判断・表現	C	・活動の中で共同編集(Canva等)の位置付けが少しずつ広がり、協動的な学びにつなげられる機会が増えてきている。引き続き校内研修等を通して実践力をさらに身に付けていきたい。【R6年度さいたま市学習状況調査「学級の友達とて話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」の質問項目において、肯定的な回答の割合が91%以上】(R5年度92%)

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	・国語の文の中における主語と述語との関係を捉える問題に課題がみられた。回答類型を見てみると、主語を形式的に判別しているだけで、文の構成を理解した上で、主語と述語との関係を捉えることができていない児童がおよそ35%いた。また、選択式の問題であるにも関わらず無回答児童がおよそ4%と多い。 ・算数の除数が小数である場合の除法の計算(540÷0.6)について課題がみられた。回答類型を見てみると、正答「900」に対し、「90」と回答している児童がおよそ30%といた。これは、除数の0.6のみ10倍して整数にし、540÷6を計算していることが原因と考える。また、無回答の児童もおよそ5%と多い。
思考・判断・表現	・国語の目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる問題に課題がみられた。回答類型を見てみると、相手が知りたいことを取り入れて、優先して伝えることを明確にしていることを捉えることができていない児童がおよそ25%いた。 ・算数の計算に関して成り立つ性質を活用して、計算の仕方を考察し、求め方と答えを式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題に課題がみられた。回答類型を見てみると、説明不十分な回答が多く見られた。この問題に限らず、全体的に記述式の問題の正答率がやや低い傾向にある。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	・国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」において課題がみられた。漢字や言葉の意味を考えて使うことができていないと考えられる。 ・「数と計算」の項目において課題が見られた。いろいろな数の計算、1あたりの量や四則計算のきまりを正しく取り扱うことなど、計算の方法だけでなくその意味を考える活動を大切にしていきたい。
思考・判断・表現	・理科「エネルギー」を柱とする領域の平均正答率が低く、同領域の異集団比較において、市平均の結果を5、6年とも下回った。実験用具の正しい取扱いや理科の用語の意味理解に課題見られる。同じ実験を行ったにもかかわらず他のグループと違う結果になった場合や、実験を複数回行ったときにばらつきが生じた場合、その要因を見いだす際に器具の取扱いについて再確認したり、実験の方法を検討し、必要に応じて改善する学習活動を増やしていきたい。

③	中間期報告	中間期見直し	
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	・授業の始めや終わりに「ドリルパーク」や「スタサブ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む、月に1回程度、個別に学習計画を立てるまでの一連の流れを形成することができた。	変更なし
思考・判断・表現	C	・まだまだ、活動の中に共同編集を位置付けることができておらず、協動的な学びにつなげることができていない。校内研修を通して、実践力を身に付けていきたい。	・協動的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるように、活動の中で共同編集を実施する【各単元で1回以上実施】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【島小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	デジタル学習が適した児童と、書くことが習熟につながる児童が混在しており、どちらか一方を選択することが難しいことがわかった。デジタル教材によるスタディ・ログのよさと、ドリルやプリント等を書いたものを教師が見取り指導することのよさのバランスについて考えていき、より一層、児童の基礎・基本の定着、習熟を図ってきたい。
思考・判断・表現	活動の中心に必要に応じてICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付けることで、協働的な学びを通して考えたり、表現したりする方法を身に付け、力を発揮できる児童が増えた。一方で、ICT活用能力に差があるため、タイミングがなくてもできる方法や個の能力に応じた方法を検討、取り入れることで、ICTを活用した協働や、表現する機会をさらに増やしていきたい。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;学習上の課題&gt; 多くの児童で、基礎的・基本的な知識・技能の定着に課題がみられる。(特に、漢字や計算)</li> <li>&lt;指導上の課題&gt; 児童が反復・習熟に取り組む時間が十分に確保されていない。</li> </ul>	⇒ <ul style="list-style-type: none"> <li>-低学年は「ドリルパーク」中学年・高学年は、「スタサプ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む時間を確保する。【週3回以上の授業での実施、宿題、朝の時間の活用】</li> <li>-児童の学習履歴を確認し、個別に学習計画を立てる時間を設定する【月に1回程度】。</li> </ul>
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;学習上の課題&gt; 令和6年度さいたま市学習状況調査における国語・算数・理科の「思考・判断・表現」の記述式問題の正答率が低い。</li> <li>&lt;指導上の課題&gt; 授業で児童が自己表現する場面が少なく、それに対する手立てが十分に組み立てられていない。</li> </ul>	⇒ <ul style="list-style-type: none"> <li>-活動の中に必要に応じてICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付け、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする。(低学年:学期に1回程度から増やしていく、3学期には単元に1回程度、高学年:単元に1回程度)</li> </ul>

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	宿題や週3回以上の授業だけでなく、自習や自主学習等で「ドリルパーク」や「スタサプ」を活用して習熟を図る児童の様子が見られたが、書くことで習熟を図りたい児童もいるため、デジタルだけでなく、ドリルやプリントなど実際に書く活動も取り入れ、多面的に習熟を図っていくことができた。
思考・判断・表現	B	ICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付けたことにより、発達段階に応じた様々な取り組みがなされ、個別最適な学びから協働的な学びへの効果的なつながりや、それで得た学びを通して考えたり、表現したりする方法を身に付け、力を発揮できる児童が増えた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>-国語では、示された言葉を漢字で書く問題に課題がみられた。同音異義語が複数ある言葉のため、正しい漢字を選んで書くことができなかったと考えられる。また、無回答児童がおおよそ7%あり、苦手としている児童が多いことが伺える。</li> <li>-算数では、数直線上に示された数を分数で書く問題に課題がみられた。解答類型を見ても、数直線上でひとつのめもりに着目し、分数を単位分数のいくつ分として捉えることができなかった児童が約73%と非常に多くみられた。0~1までのめもりがいくつに分かれているか(分母)は理解しているが、0~2までになると分母が正しく読み取れなくなってしまったり、分母を0~2のめもりの数で捉えてしまったりすることが原因だと考えられる。</li> </ul>	
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>-国語では、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる問題に課題がみられた。解答類型を見ても、いくつかの資料から自身の考えを伝えるための理由を選んだり、出された条件を満たしたりすることができなかった児童がおおよそ29%いた。</li> <li>-算数では、分数の加法について共通する単位分数を見だし、加数と被加数が共通する単位分数のいくつ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題に課題がみられた。解答類型を見ても、共通する単位分数をみつけ、それぞれいくつ分になるかをたずねて考え、説明することが不十分であった解答が多く見られた。</li> </ul>	

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>-算数では、基準量と比較量に着目し、式に合う問題の正しい組み合わせを選ぶ問題に課題が見られた。解答類型を見ても、正しい組み合わせを選ぶことができた児童は34.7%と低いが、片方だけが正答である児童については、1kgの棒の長さや求める問題を選んだ児童は54.2%、ひもの長さや比較し、何倍であるかを求める問題を選んだ児童は72.9%であることから、基準量と比較量に着目する問題の解決への課題はあるものの、問われ方によっては正しい解答ができる力があると考えられる。</li> <li>-理科では、乾電池の直列つなぎについて、正しいつなぎ方とはたらきを理解しているかについて問われた問題に課題が見られた。解答類型を見ても、直列つなぎの正しいつなぎ方とはたらきについて正答した児童は約35%であるが、並列つなぎと直列つなぎのはたらきを理解していなかったり、乾電池の向きや電気が流れていない児童が正答した児童と同程度であり、また、電気の通り道を「回路」と正答できた児童が32%であることから、実験の楽しさが優位となり、理科としての知識が十分に身につけていないと考えられる。</li> </ul>	
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>-国語では、相手に伝えるように理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考える問題に課題が見られた。解答類型を見ても、スピーチAとBを比較し、アドバイスによりどのような変化があったかを見取ることができなかった児童が72.3%と非常に多かった。「はじめてに」や「問いかけやよびかけ」などの言葉の意味を、この問題を解く上で必要な意味でとらえることができなかったためだと考えられる。</li> <li>-算数では、整数倍にあたる2つの数量関係の場面と図を関連付ける問題に課題が見られた。解答類型を見ても、もとにする数を「1」としてとらえることはできているが、整数倍されたときにいくつになるかよりも、何倍したかに着目して解答した児童が、正答した児童の割合より多かった。「倍」という言葉に引っ張られて2本の線分図の長さのみに着目したり、問題文で示された数字に着目してメモリの数字のみを頼りに解答したりしていると考えられる。</li> </ul>	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	低学年は「ドリルパーク」中学年・高学年は、「スタサプ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組むことができた。また、児童の実態に合わせて学習計画を立てながら学習活動を進めることができた。	デジタルだけでなく、ドリルやプリントなど実際に書く活動も取り入れ、多面的に習熟を図っていく。【週3回以上の授業での実施、宿題】
思考・判断・表現	B	活動の中に必要に応じてICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付けることで、協働的な学びを通して考えたり、表現したりする方法を身に付け、力を発揮できる児童が増えてきた。校内研修を通して引き続き実践力を磨き、児童に還元していきたい。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)